

第四章 丸屋商社の発展

一 丸善初期の営業状態

丸善の開業は忽卒のことであつたために、新浜町の店舗はよほど手狭であつたらしく、間もなく付近の相生町二丁目に移転した。そして店を二つに分けて、一方を書店とし、一方を薬店とした。しかしそれでもやはり不便であつたためか、明治四年になって、さらに堺町二丁目二番地に移り、書店と薬店とは、隣り合わせではあるが、別々に店舗を構えることとなつた。そしてさらに薬店の隣に静々舎と称する診療所を設け、有的はここで一般の人々の診療に従事した。そして来診の患者には処方箋を与えて、薬店で調剤させることとしたという。相生町の店の二階には、もともと医学生を合宿させて、塾としていたが、明治五年頃から堺町の薬店の二階に英学生を合宿させ、これを研究舎と称した。新宮涼園が会頭となつて、英学を講習したのは、この研究舎においてである。藤山雷太、甲賀信郎などもここで修業した一人であつた。藤山雷太は後の著名な実業家であり、藤山愛一郎の父である。甲賀信郎は有名な回天艦長甲賀源吾の甥である。

丸屋商社は、創業の時には、和本なども店に置いたらしいが、後には特殊なもの他には、原書以外は扱わなかつた。そしてその顧客は、横浜在住の人々よりは、東京からわざわざ買い求めに来る者が多かつたという。明治

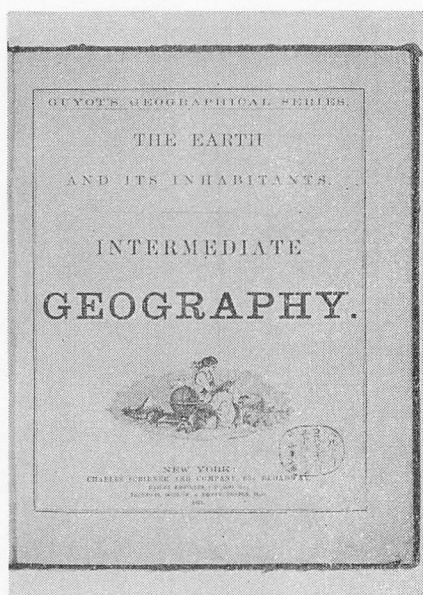
五年頃ハルツホルンの「医学提要」(H. Hartshorne-Conspectus of the Medical Science)二ダースほど箱入りで入荷したので、注文が多過ぎたのではなかったかという話もあったが、これを東京へ送ると、たちまち売り切れたために、みな意外に感じたという。なおこの書物の第二版は、太田用成(浜松県立病院院長兼浜松医学校校長)、柴田邵平(同病院医員兼医学校教官)、虎岩武(同病院医員兼医学校教頭)の三人によって翻訳され、「七科約説」の名で明治十二年に上下二冊の洋装背革本として、浜松の鞍智逸平の手によって印刷出版された。そして丸善もその発売所となっている。七科とは解剖・生理・化学・薬物・内科・外科及び産科を収めているからである。当時として、この書物は、多数の医学研究者に裨益するところの多かったもので、医術開業試験の制度を実施することができたのも、この書の刊行が与って力があつたと云われている。

丸屋は、その創業のはじめには、書籍といい、薬品といい、すべて横浜の外人商店を経て輸入したものである。その商店にはアレン(Allen)、ブラオル、ハルトリー(Hartley)、マルコム(Malcolm)、チップメン、マイヤー商会などがあつた。就中アレンとは取引が多かつたらしい。ハルツホルンの「医学提要」も、アレンに注文したも



堺町丸屋見取図

のようである。ブラオルからは薬品を仕入れた。ハルトリーからは書籍及び薬品を仕入れた。当時は外人商館との取引には、いろいろ困難があつたらしく、ハルトリー商館へ荷物を引き取りに行った際に、ハルトリーに不法のことがあつたために、丸屋の店員であつた松本善介が、手きびしく反撃し、以来ハルトリーはあまり無法のことを言わ



ハルトリー印のある書籍

なくなったという話がある。

マルコムからは薬品を仕入れた。チップメンからは書籍を仕入れた。チップメンは後に枢密顧問官となった細川潤次郎が明治四年に工部少丞として渡米の際サンフランシスコで知り合いになった書店の番頭であった、細川氏を頼って来日したものだという。マイヤー商会からは、ドイツやフランスの書籍を仕入れたそうである。

このように丸善の初期の輸入は直取引ではなく、横浜の外人商館を経由したものであった。外国との直取引は、サンフランシスコのローマン (Roman & Co.) に書籍や文房具を、またクラアン・エンド・ブライハムに薬品を注文したのが最初であるという。明治六年十二月にローマンに注文した石版や白墨が横浜税関に到着しているから、恐らくその頃のことであろう。ローマンは本社がニューヨークにあったので、有的から当時日本公使館の書記官であった塚越〔鈴彦?〕に、そのエージェントを依頼した書簡が伝わっている。

明治七年頃になると、イギリスのロンドンのショルト・ショルト及びウエーランド等からの仕入れがはじまり、海外からの直接取引は、徐々に軌道に乗ることとなったのである。

当時外国語は勿論一般に普及せず、早矢仕民治の追憶によると、店員は洋書の書名が容易に覚えられないで、困難したという。そこで書名を翻譯して、これに定価を付して一枚板に列記したが、原語と対照することができないために、止むを得ずウェーランドの修身書は、書名が三行に書いてある。また同じ著者の経済書は書名が四行に書いてあるというように、書名の表記の様式などによって記憶させた。そして夕方になると、金沢廉吉が、店員を集めて、誰はどの書物を出せ、誰はどの書物を出せという風に訓練したという。

またこの頃松本孝助という東京の活版業者が、ヘボンの辞書の中から和英の部だけを小本に印刷して、その売りを丸屋に委託したことがある。ある時その送本の包紙に、ローマ字の活字でアルファベットを書き、これに仮名を付したものの反古があった。早矢仕民治はこれを発見して、大切に保存して暗誦することを努力した。これが丸屋の店でローマ字を学ぶようになったはじめだという。その当時はこれに類似したものがなかったために、清水勝三という店員がその反古を奪い取ったといって大喧嘩になったという逸話もある。

明治五年に政府はそれまで久しく行われた太陰暦を廃して、太陽暦を採用した。(明治五年十二月三日は明治六年一月一日となった)これは国民生活に大きい影響を与えたものである。福沢諭吉はこの時「改暦弁」を著して、改革の必要な所以を国民に説明した。これは慶応義塾の蔵版であるが、従来の関係から丸屋でも売り出した。ところが一般の需要が多いために、その製本が間に合わず、印刷したままで受け取って、店で店員らが製本した。わずかに十九丁の小冊子であるが、紙を折る手数があるので、当時入社したばかりの小柳津^{おでんづ}要人^{かなめ}もこれを手伝ったが、函館戦争の時に受けた負傷のため、右手の拇指が不自由であったので、中々捗らなかったという。



福澤諭吉著「改暦弁」

二 東京支店の開業

明治元年四月江戸開城の後、徳川家達（田安亀之助）は駿府七十万石に封ぜられて、西に移った。新政府は江戸に鎮台を置いて、旧幕領を支配したが、すでに諸侯はすべて江戸の屋敷を引き払い、多くの武士の在住することによって繁栄した大都市は、一朝にして衰頹した。広大な邸宅が捨て売りにされて買手がなく、山の手の各処に桑や麻を栽培することが奨励されたのは、

この頃のことである。

しかしこの情勢は間もなく変化した。新たに新政府の支配に帰した関東の土地の人民を綏撫するために、七月には江戸を改めて東京と称し、鎮台は廃せられて鎮将府となり、特に市政に関しては東京府が設けられた。そして九月には車駕は京都を発して、翌月東京に着輦せられ、その年は一旦京都に還幸せられたが、明治二年三月には再度東幸せられ、東京城を改めて皇城とし、事実上これを皇城と定められた。嘗て幕府の所在地として、武家権力の中心であった江戸は、ここにまた新日本の首都として復活することとなったのである。

丸屋の東京支店は、本店の開業から一年あまり遅れて開設された。その場所は日本橋品川町裏河岸（現在の室町

一丁目三番地付近）である。そのあたりは釘や金物の店が多かったために、釘店と呼ばれていた。ここに片岡磯七が、島屋の屋号で経木店を開いていたが、丸屋の店員沢井秀造の母は磯七の姉であったので、早矢仕有的は、秀造の口利きによってこれを買収して、丸屋の東京支店とした。明治三年三月のことである。しかし屋号は事情があつて、旧によって島屋といい、店主の仮名を善六といった。実際に業務を担当したのは、沢井秀造の紹介で入社した柴田安藏である。

島屋の存続した期間は短かった。しかし明治五年に発行された桑田衡平訳「内科摘要」の奥付に発売書林として、山城屋佐兵衛及び島村利助と並んで、釘店の島屋善六の名が見えているものもある。また嘗て三次健太郎（半七の孫）の家には、当時薬の分量を量るために用いたといわれる杆秤一挺が所藏されていたが、その函書には、東京島善会局と記されてあった。これによって島屋が、書店並びに薬店を営業していたことがわかる。

釘店の島屋の開業と同年に、早矢仕有的は、日本橋通三丁目十四番地にあった、呉服店の竹屋こと鈴木佐兵衛から、間口八間（一四・五五メートル）奥行二十二間（四〇メートル）の家を、地所共に三千五百円で買収した。佐兵衛は政府から蚕卵紙に貼付する印紙の専売を許可されたために、本業の呉服の営業に疎かになり、中村道太の仲介によって店を譲ったものであるという。この新店は丸屋善七の名義で書籍の販売を取り扱った。それまで島屋にいた三次半七は、この店の主任に転じた。

翌明治四年三月、有的は更に斎藤豊八の手によって書店の北隣に当る日本橋通三丁目十五番地に店舗を購入して唐物店を開いた。釘店の柴田安藏が、支配人としてここに移り、さらに斎藤豊八がそのあとを承けた。丸善が唐物

を營業するようになったのはこれがはじめである。この書店と唐物店が、そもそも丸善の現社屋の起原である。

明治七年になって、本町二丁目十四番地に、薬店が開設された。この薬店の支配人は、書店の支配人であった三次半七が兼任した。釘店の島屋は、ほぼこれと同時に廃止されるようになったものと思われる。

日本橋は江戸の市街の中心である。楓川に橋が架せられたのは、慶長のはじめであるというが、その南岸の四日市は、徳川氏の入国以前から、付近の人民の物資の取引の場所であって、明治の初年には、まだ多くの葭簀^{よしす}張りの床店が賑わっていた。

それと共に日本橋は、品川を経て京都に向う東海道の起点であり、いまは高速道路の下に隠れたが、里程元標の所在地である。寺門静軒の「江戸繁昌記」には

「橋上雜閑シ、公侯ノ長槍ノ来往林ノ如シ。況ヤ諸凡ノ履写履^{モロモロ}履^{リシヤロウダ}ハ、夜間丑寅之交ニ蹻然トシテ或ハ少シク絶ユトイフ」

といっている。従って、日本橋から南に向う通り、即ち通町は、江戸第一の商業の中心であった。幕末の動乱のために、一時はその繁華も寂れたが、やがて東京が首都となると、それも間もなく回復した。

全体「江戸町づくし」などによっても、通町の一丁目から四丁目にかけては、幕末以来、銘茶、金物、繰綿、紙、紅白粉、鰹節、干肴、畳表、蠟燭、筆墨などの間屋が多かったが、「続江戸砂子」にいうように通一丁目から二丁目にかけては書店もまた数多くあった。その中には唐本・和本を扱った高山房^す（小林新兵衛）、武鑑や「江戸名所図絵」の出版で名高い須原屋（北畠茂兵衛）などがある。明治になっても、この附近で万孫（万屋孫兵衛）、大倉

書店（大倉保五郎）、梶屋（江島伊兵衛）〔以上一丁目〕山城屋（稲田佐兵衛）〔以上二丁目〕長亀（長野亀七）、江藤喜兵衛、金花堂佐助、山城屋（稲田源吉）〔以上四丁目〕などの名が知られている。この中には書籍の出版を業としたもの、仲買に従事したもの、古本の売買を専門にしたものなどいろいろあるが、この界限が書籍業の中心であったことは、明らかである。丸善は実にこの書籍商業の中心地に進出して、西洋の図船舶載の新しい旗幟を樹てたのである。

三 清水卯三郎の事業

早矢仕有的が、丸善の支店を東京の日本橋に開設したのと前後して、清水卯三郎が、ほぼ同じ性質の書店瑞穂屋を開業したことを、ここに特に書き添えて置きたい。清水卯三郎は武蔵国羽生村（埼玉県羽生市大字羽生）の名主の家の出身で、文政十二年（一八二九年）に生れた。若くして漢学・数学・薬学を学び、後に箕作阮甫について蘭学を学んだ。その間には、筒井政憲に随行して下田に赴いたこともあり、海軍伝習の供をして長崎に赴いたこともあり、文久三年の薩英戦争の時には、イギリスの旗艦ユーリアラスに搭乗して鹿児島に赴いたこともある。よほど好奇心も強く、行動力にも富んだ人物であった。

慶応三年に幕府がフランス政府の招きに応じて、パリの万国博覧会に、日本の特産品を出品するに当って、彼は多種類の工芸品その他の蒐集に努力し、その出品物の管理のために、徳川昭武すなわち民部公子に随行して渡欧した。博覧会で日本コーナーに水茶屋を設け、三人の日本娘（芸者）に、振袖姿で接待させて人気を集めたのも、彼のア



清水卯三郎
(長井五郎著「しみづ
さぶらう略伝」より)

アイデアによるものだという。

彼が帰朝すると、間もなく幕府は倒れたが、彼は政治の変動に関係なく、ヨーロッパ文物の輸入に強い熱意を持つようになり、居を日本橋の本町三丁目に移し、ここで瑞穂屋の名で書籍・薬品・器械類の輸入並に出版等の事業を起した。いわばある意味で、丸善の競争者となったわけ

である。

瑞穂屋で出版した書籍には、「本朝通鑑」や、物集高見の「ことばのはやし」のようなものもあるが、翻訳書も多い。殊に大月亀太郎・河田鱗也訳「歯科全書」、渡辺良爾著「歯科学」、小林義直訳「歯科提要」、小島原泰民編「歯科解剖学図譜」、荒木盛英編訳「歯科手術学」のように、歯科学に関するものが多数を占めていることが注意される。また明治二十四年から「歯科雑誌」という月刊雑誌を発行している。歯科の医療器械を輸入したことも、彼の主な事業の一つであった。昭和二十五年に彼が歯科商工功労者顕彰会から顕彰状を贈られたのは、実にこの功績によるものである。

なお明治十四年に彼が著わした「西洋烟火之法」は、丸善が発兌元となっている。また明治十六年一月出版の「日本里程総覧」には、出版発売人として、清水卯三郎が、丸屋善七と名を並べている。また明治十七年に、清水卯三郎と都筑直吉の発行に係る Sargent's Standard 3rd. Reader には、丸善が売捌人となっている。これから見ると、瑞穂屋と丸善とは、出版事業で互に競争すると共に、また提携していたのである。

清水卯三郎は、こうしてヨーロッパの図書並に器械の輸入に力を注ぐと共に、日本の新文化運動の推進者の一人となった。彼はヨーロッパでアルファベットが使用されているところから、日本でも音標文字である仮名の使用を普及させることが必要であると考え、フランスで平仮名の字母を鑄造させて、これを日本に持ち帰った。明治六年に、西周、津田真道らによって、明六社が創立されると、彼もこれに参加し、「明六雑誌」第六号には、「平仮名の説」を書いてゐる。彼は早くからオランダ語、英語に（また若干ロシア語にも）通じていたので、明治七年に「Tate's Outline of Experimental Chemistry. 1850」を翻譯して公けにしたが、その表題を「ものわりのはし」(理科階梯の意味か)（またのなせいみ「含密」のてびき）と名づけたのも、またこの主義に基づいたものである。

彼はこのように多趣味多方面で、新文化の先駆者として活動したが、その事業は不幸にして永続せず、丸善が次第に大を為すのに対して、瑞穂屋は全く影を潜めた。彼は明治四十三年一月に八十二歳の高齢で歿したが、その晩年はむしろ不遇であった。しかし明治初年の啓蒙期における彼の事業は、早矢仕有的に及ばないまでも、没すべからざるものがある。最近彼の自伝の「わがよのき」上（慶応三年まで）が発見され、これらを資料として、長井五郎氏によって、「しみづうさぶらう略伝」（昭和四十五年）が公刊されたのは、まことに喜ばしい。

四 大阪支店の開業

東京支店の開設に少し遅れて、丸屋はまた東京に仕立店と指物店とを開業した。仕立店は元来、福沢諭吉が、日本人に洋服の着用を普及させる目的で、明治五年に慶応義塾の出版局の中に、衣服仕立局を設けたのがはじめてあ

る。その業務を担当していた高橋岩路は福沢と同じく中津藩の出身で、洋服仕立職であった高橋藤之助の養子となり、洋服の裁断の技術を身につけたものである。しかし教育機関の中で、こうした業務を営むことが適当でなかったためであろうか、その年の十一月に、仕立局は塾から離れて丸屋の経営に移され、高橋岩路は、丸屋の社員となった。そして店は、はじめ唐物店の中に置かれたが、翌年二月銀座二丁目に移った。明治十四年になって、高橋は丸善から独立して、麻布本村町で営業をはじめたが、その事情は不明である。高橋は引き続いて業界で活動し、明治四十年に歿している。

また指物店は、明治六年頃横浜太田町にあった指富という西洋家具店を買収し、間もなくこれを東京の尾張町二丁目に移した。これを担当したのは、豊橋出身の服部源助であった。明治十年に上野公園で開催された第一回内国勸業博覧会には、輸入品を模造したベッドなどを出品したが、その記事が当時の「郵便報知」（矢野文雄執筆）に出ている。この仕立店にしても、指物店にしても、丸屋が西洋文化の輸入を多方面に試みようとしたことが知られると共に、それが福沢諭吉乃至慶応義塾と、密接な関係を持っていたことは、注意すべきことである。

東京について支店が設置されたのは、大阪である。大阪支店の設置については、石井謙道の勧誘が大いに力があつたという。石井謙道（信義）は石井宗謙の子であつて、江戸で算作阮甫らについて蘭学を修め、後に大坂に赴いて緒方洪庵の門に入り、医学所の教授となった。維新の変動によって、医学所は大学東校となったが、明治三年に大学少教授として大阪医学校校長に転じたものである。恐らく謙道は東京に在った時から、洪庵門下の同窓である福沢諭吉を介して、有的とその事業を知り、大阪へ赴任するに及んで、その地に支店の開設を慫慂したものであろう。

そこで有的は、東京の釘店にいた桜井慶三に命じて、大阪南久宝寺町の堺筋を西に入った場所に家屋を求めさせ、明治四年一月丸屋善藏の名義で営業を開始した。この店はやがて同年暮頃、心斎橋筋北久宝寺町四丁目に移転した。心斎橋筋のこのあたりは、今は全く東京の馬喰町や小伝馬町のような問屋街となったが、もとは東京の日本橋と同じように、多くの書肆が軒を並べていた。博労町四丁目には古くから名高い青木嵩山堂があり、その南には中川静文堂があった。やや後になると大和田建樹の鉄道唱歌を発売したことで有名になった、三木佐助書店（現在の三木楽器店）も、田中宋栄堂も柳原書店も、更に後には立川文庫の出版で名を知られた立川文明堂も、またこの付近にあった。いわばこの一帯は、当時の大阪の文化センターともいべき地域であった。丸善の開業も、その点で意義が深かったわけである。

しかしはじめに大阪支店の開設を委ねられた桜井慶三は、間もなく不行跡のためにその地位を追われた。これに代って大塚熊吉と鬼頭良助、さらに柴田安藏等が大阪支店詰となった。有的はこの処分のために明治五年の春に西下したが、その序に郷里に帰省した。実に十三年ぶりであったという。この時は福沢諭吉も大阪へ行を共にしたらしい。鬼頭良助の談話によると、福沢は大阪支店に立ち寄って、広告文を認めたという。なお福沢は、その年天津から帰京の途中で神戸に立ち寄り、そこから丸屋善藏宛に書簡を送っている。その文中

（前略）其後御店の商売は如何、御様子相伺度、薬品が売れるか原書が売れるか翻譯書が売れるか、訳書は注文之通り東京より相廻り候哉、当時差向注文之品有之候哉、私帰宅の上相廻し可申、四月より七月盆まで之間に翻譯書之売捌大凡何程に候哉、訳書に限らず大阪出店の商売は弥以繁昌之見込有之候哉、店の人数に不足は

無之候哉相同道候（後略）

とあるのを見ると、いかに福沢が丸屋の事業に深い関心を持っていたかが察せられる。

ここに特記すべきことは、慶応義塾の医学所の分校の開校が、丸屋の大阪支店と密接な関係を持っていることである。福沢論吉が松山棟庵と相談して、三田の慶応義塾内に、別に校舎を新築して、学則を制定し医学所を開設したのは、明治六年の六月である。しかもその年の十月には、大阪慶応義塾と称する義塾の分校が、大阪に設立された。そしてその校舎の置かれた場所は、安堂寺橋通三丁目にあった丸屋善蔵の控家であった。分校の学科教則は、ほぼ本塾に則り、その教職員は、莊田平五郎を主任として、本塾から派遣され、大阪の分校から東京の本塾に移ることも、本塾から大阪の分校に移ることも出来る仕組であった。この分校は明治八年まで継続して、入学者は八、九十名に及んだ。後にこの分校は都合によって阿波の徳島に移されたが、生徒の多くは本塾に移ったという。

この大阪支店は、明治十八年の丸屋の整理に際して、細流会社の経営に移されて営業してきたが、二十六年になって、再び丸善株式会社に吸収され、その大阪出張所と改められた。更に三十二年二月には大阪支店として復活し、金沢末吉がその支配人となった。ところがこれに隣接していた三木佐助書店から、支店の地所建物を譲り受けたという申出があったために、支店ではこれに応じて、地所建物を三木書店に売却し、新に博労町四丁目百十四番屋敷に地所建物を買い入れ、四月から建築に着手して、七月に移転した。これが現在の大阪支店の起原である。

大阪支店が、横浜の本店や東京支店と同様に、書籍・洋品類と共に薬品を取り扱っていたことはいまでもない。しかし明治八年二月になって、薬品部を書籍部から分離して、道修町^{どしやう}二丁目三十四番地に丸屋薬店を開設した。こ

れは全く道修町が久しく薬種店の町であったために、舶来の薬品も、その場所で取引することを便宜としたからであろう。薬店は彦根出身の瀬古宗七がその主任となり、松本一造が書店の経営を担任した。薬店はやがて瀬古宗七に代って鬼頭良助がその主任となり、更に鬼頭良助は横浜の薬店に転じて、横浜薬店の西崎彦七が大坂薬店に移った。その後を承けたのが須賀磯八である。磯八は越前（福井県）坂井郡高棕村の出身で、少年の時に村を出奔して、明治四年に丸屋に入社したものである。はじめは東京の唐物店にいたが、明治九年頃に大阪の心斎橋筋に医療器具店を開き、十二年頃これを道修町の薬店に合併し、西崎彦七の後を承けて、その経営を担任することになったものである。後に有的の女婿となった和田治衛も、一時ここに勤務したことがある。

この薬店は明治十八年の整理の際にも手離されないうで、丸善の唯一の支店として存続した。これは須賀磯八の経営の才が優れていたためであろう。ところが明治二十四年四月の磯八から有的に宛てた書翰に、薬店の赤字が七千



八 磯 賀 須

四百余円に及んでいることを報告しているのは、やや理解に苦しむ点がないでもない。その間にどのような事情が存在したかは不明であるが、明治二十八年三月には、丸善は臨時株主総会で大阪薬店の廃止を決議し、七千九百円でこれを須賀磯八に譲った。こうして大阪の丸善薬店は完全に独立し、昭和十二年に株式会社組織を改め、昭和十七年に丸善薬品産業株式会社と称し、以て現在に及んでいる。現在の社長は磯八の孫の柳原良平である。

五 京都及び名古屋支店の開業

大阪支店について開設されたのは、京都支店である。その開店は明治五年八月で、場所は二条通柳馬場東であつた。この店は新宮涼園の住宅の表座敷であつて、その奥には涼園の父の涼亭が住んでいた。涼亭はすなわち名医新宮涼庭の子である。涼園は以前から横浜の丸屋薬店の二階で、有的と共に英学を勉強した同学である。恐らくその関係から涼園の住宅を借り受けることとなつたのであろう。経営の名義人は丸屋善吉であつたが、実際にその衝に當つたのは氏家直助であつた。間もなく柴田安藏が大阪支店から移つて、引き続いてその経営に當つた。〔柴田安藏は翌年有的の義姉早矢仕しうと結婚した〕その取り扱つた商品はやはり書物と薬品であつた。明治七年に支店は寺町通姉ヶ小路上ル場所（本能寺前）に移転した。寺町通は東京の日本橋通、大阪の心齋橋筋と同じく、当時は古書店の多い地域であつたから、やはり同様の事情であつたのであろう。寺町通は日本橋通や心齋橋筋と違つて、今でも書籍店が多いことは、人の知る通りである。当時の京都府知事榎村正直は、丸屋の事業に特別の保護を与え、京都支店には京都府御用書肆の看板を掲げたという。しかし京都は東京や大阪と違つて、保守的空気の強い土地柄であつたから、その營業状態も思ひなかつたのであろう。はじめは書店と薬店とがあつたが、久しからずして薬店は廃されて、主任であつた鬼頭良助は大阪に移り、明治十年十一月には柴田安藏も横浜に歸つて、間もなく京都支店は閉鎖された。京都支店は、わずかに五年余の間存続しただけであつた。丸善の京都支店が、三条通麩屋町に再び開設されるようになるのは、京都帝国大学が開設されてから、やや程経た明治四十年のことである。

明治七年八月には名古屋支店が設置された。その場所は本町八丁目（現在の御幸本町八丁目）である。後（明治十二年頃）に本町二丁目（丸の内二丁目）に移った。これは、もと慶応義塾出版局の出張所を買収したもので、その営業は他の支店と同様に、書籍及び薬品の販売であった。その担当者はその時入社した豊橋出身の田原囁（近次）である。この支店は他の東京や大阪の支店などと違って、仮空の名義人を立てず、単に丸屋善八出店と呼んだのは、異例である。

ここに付記したいのは中屋のことである。中屋は明治十年に檜物町の交銀私局の隣に開店した。名義人は平尾東三（後に穂積寅九郎）であったが、実際上の経営は、早矢仕有的がこれに関係したらしい。それは有的の甥の虎吉（勝四郎の子）が、この店に勤めていたことから想像される。店務は長尾鐘太郎という番頭が、これに当った。はじめは簿記用の野紙などの販売を主としていたが、後には各種の帳簿なども取り扱い、一般の製本も引き受けた。その他石版・銅版製の株券や、手形・鑑札・切符類なども依頼に応じて製作した。なお複写器・印肉なども販売している。この印肉は印刷局の製造に係るもので、朱肉・黒肉の他に、青肉・緑肉などもあった。またその関係で、印刷局で製作した写真石版の「国華余芳」や各種の法帖類の販売も取り扱った。

明治十四年頃に、中屋は京橋の紺屋町にあった活版所を合併したが、この活版所は欧文の活字を持っていたために、丸善の加盟していた洋書翻刻組合（後の六合館）などの印刷も引き受けるようになった。明治十六年頃には、この活版所は、「いろは新聞」の発行所である京橋竹川町の藤平活版所と合併して、大いに業務を拡張したが、明治十八年になって、「いろは新聞」は、八幡儀三郎の手に移り、中屋の活版所は、八幡氏に賃貸することとなった。この

賃貸契約は中村道太の保証によって行われたものであったが、後に紛議が起って解消した。しかしその間に機械・活字等に傷みがあって、中屋は、かなりの損害を蒙ったという。なお中屋は丸家銀行の倒産の際に、早矢仕有的の手から離れて、金原明善の経営にうつったが、丸善との関係は、その後も久しく持続され、大正年代まで丸善の製本は、ほとんど中屋が取り扱ったという。

六 丸善の火災

丸善の経営は、こうして年と共に順調に発展したが、ここに図らずも東京支店は火災の厄に見舞われた。明治九年十一月二十九日の午後十一時二十分頃、数寄屋町二番地（現在の八重洲二丁目五）の鈴木という家から出火し、折から西北の風が強かったために、新富町、新栄町一帯までをも焼き払い、日本橋通は南は京橋際で止まり、北は丸善の書店、唐物店を全焼して、その北隣の唐物屋丸久を半焼にして止まった。鎮火は三十日の午前六時半頃であった。全焼失戸数は約一万戸に近く、死者もかなりあった模様である。「東京日日新聞」の岸田吟香は、この時京橋と紀伊国橋との上に、その発売する精錡水を無代で進上するという貼紙を出したために、火災の灰などが目に入って困った者が門前に黒山を築いたという。丸善は創業以来不幸にして四度も火災に見舞われているが、これは、その最初のものである。丸善が全焼して、その北隣で火が止まったのは、丸善に取って不運であったことは、いうまでもないが、しかし最後に焼けただけに火の廻りも遅く、商品などもある程度まで持出すことができたのではないかと思われる。それは早くも、十二月三日から、土蔵前で仮営業を始めていることから察することができる。罹

災後の改築がいつ頃出来上ったかということは、確実にはわからないが、店の奥に住んでいた有的一家は、罹災のために、しばらく銀座の仕立店の二階に仮住居をしていたが、翌十年の二月には旧居に戻っている。それから考えると、その頃書店も唐物店も、バラックにしても新築されていたらしく、丸善の復興は、意外に早かったものであろう。